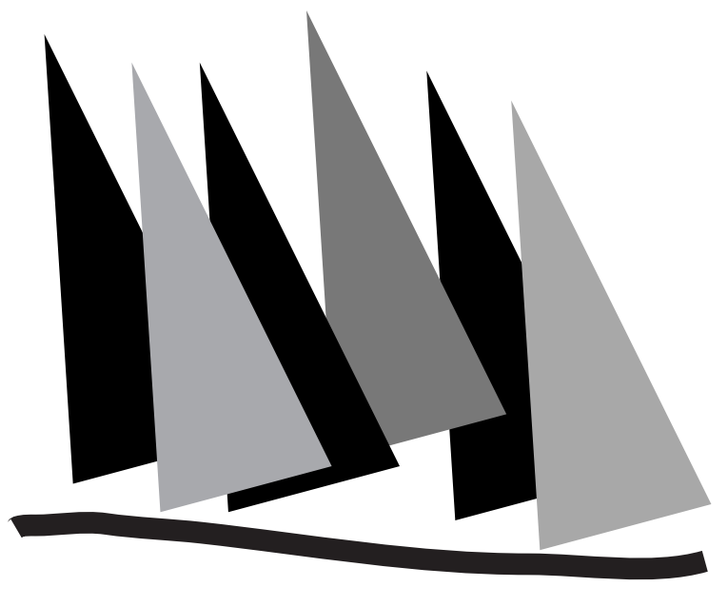
月　刊

# Mélange

## Vol.149



2020.01.26

詩と評論

月刊「Mélange」
Vol.149 2020.01.26
「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」149号　目次

## 詩・俳句


東方三博士　詠〈俳句〉……岩脇リーベル豊美　08
れいせい ……大橋愛由等　10
ごめん ……月村香　11
真珠採り／かなへび……にしもとめぐみ　12
宴こぼし ……中嶋康雄　13
遺失物……高谷和幸　14
ベランダ……田村周平　15
再会　……高木敏克　16
庭にも海岸にも音が沈む／WORK2020 DMajor ……大西隆志　17
夕方に出かけるから ……木澤 豊　18
とぼとぼ ……黒田ナオ　19


## 連載小説


1回目／「カフカ教団」……高木敏克　03


## 評論


立ち読み人の斜め読み／筒井祥文川柳句集『座る祥文・立つ祥文』を読む……野口裕　04


## 連載エッセイ


「益田っこ通信 No.36 名残りの世」……元正章　09
「女のみち～進学篇　⑥」……モス堀淵敬子　07
神戸詞(うた)あしび 137「旅はトラブルはつきもの　奄美紀行は今年も続く」……大橋愛由等　20


編集部だより★69／ 2019年末から2020年にかけての動静を書いてみよう。①大晦日。わたしには珍しく年内に年賀状を郵便ポストに投函する。文字中心の構成なので、あえて一言メッセージを書くことを極力抑えたこともあり、年内投函が可能になったのである。わたしは紅白歌合戦を見ないひとである。でもたまたま今年の男女の〝トリ〟の歌声を聞いた。圧倒的な声量の持ち主のMISIA。解散がおおきな商品価値を産んでいる嵐。結果は興味ないので、窓際に移動。年変わりの神戸港から聞こえる汽笛を待つ。②余裕をもって迎えた元旦。白味噌や、お節、日本酒を呑んでくつろぐ。午後2時からはじまったサッカー「天皇杯」をテレビ観戦。神戸vs鹿島の決勝。新しく立て直した国立競技場での初イベントである。今年は阪神・淡路大震災から25年という区切りの年。事前の劣勢の予想をはねのけて、ヴィッセル神戸が初優勝を果たす。ボールへのくらいつきなども素人のわたしがみても神戸の選手の方が、上回っていた。そして選手の胸の中には、震災から25年という神戸の街と神戸のひとたちの熱い思いを背負っていたと信じたい。選手たちのプレーに芯があった。それに、わたしの好きなイニエスタも活躍していて、満足だった。③年末から年始にかけて読書していたのは、『韓国仏教史』（金龍泰著、春秋社、2017）。隣国の歴史をはじめ宗教について、本書を読むことでいかに無知であったかを悟る。著者は近世の朝鮮時代の専門家ということもあり、停滞期といわれていた朝鮮仏教を捉え直している箇所の記述に力が入っているのが特徴である。／今月の「Mélange」例会第一部「読書会」の話者は濱田洋一氏。テーマは〈「華厳経」は詩のように読む。（華厳経読書案内）』〉です。（大橋愛由等記）

連載小説

# カフカ教団 ①　高木敏克

地下鉄海岸線の改札を出ると僕はまっすぐ西に向かって歩いていった。広めの地下道だが、少し天井は低く人を急かせる圧迫感があった。速足で歩くと足音は消えて水面を滑るように進めた。するとピタピタと足音が追ってきたと思ったら、小さな声で「タカギさん」と呼ばれた気がした。あわてて振り向くと、僕の肩ほどの背丈のスーツ姿の男がうつむいて歩いていた。顔全体がマスクにおおわれていて、しょぼくれた目しか見えない。男は目の前を一直線に先回りしてその先で待ち伏せするかのような勢いだ。あるいはこの男は競歩の相手を勝手に選んだだけかもしれない。案の定、小男は十五メートルほど先で少しだけ身体をひねり僕をたしかめた。いや、ひねったのは首だけかもしれない。二度見したことだけはたしかなことだ。そのしょぼくれた目には見覚えがない。でも、たしかに僕の名前を呼んだ。かなり自信に満ちて僕のことを覚えている。罠なのかいたずらなのか、いずれにしろ最初に僕が振り向いたのはまずかったかもしれない。名前を呼ばれて返事をしたようなものだ。あきらかに僕は尾行されていてその罠に引っかかった。それも、びくりと身をふるわせて自分の名前を認めてしまったのだから。そう寒くもないのに僕はコートの襟を立てて顔を伏せた。角を曲がると男は僕を待っているかもしれない。友達のいたずらなら良いが、相手のことを覚えてないと友達は怒るかもしれない。それよりも悲しめ。くだらないいたずらを悲しめ。

僕は「カフカ研究所」という看板をつくっていた。もし、不動産屋で適当な部屋がみつかれば、すぐにでも入り口に掛けられるように、釘の引っかかる穴まであけて新聞紙で包んで持ち歩いていた。ようやく見つけた部屋は事務所からそう遠くはない川沿いの道から路地に曲がるとすぐ右にある。喫茶店カフカの看板を見つけた時には鳥肌がたった。しかもＫＡＦＫＡという字しかないので、建物全体を自分のものにしたい気分だった。建物は大きな空をそこ立て切り取るように黒い影になり、そこに入るとどこにでも行けるような港の建物だった。

「喫茶店の名前はカフカなんですよ。ちょっとこちらの立場も考えてくださいよ。オタクのカフカ研究所とちがって、うちのカフカは愛称ですのよ。わかります？　カフカにしようか、ポーにしようか迷ったんですけど、ここに来るお客さんが俳句をやっていて、ポーだと韻がおかしくなるっておっしゃったものですからカフカにしたんです。わかります？　喫茶店が求めているのは意味じゃなくてイメージなんですよ。俳句の先生もそうおっしゃってたわ。ポーではなんとも怖いイメージがあるし、カフカなら気難しいイメージがある。だから、どちらもやめなさいと俳句の先生はおっしゃったんですけど、決めるのは私でしょ、けいこ先生じゃないわ、といったら、最後にけいこ先生はどういったと思います。

喫茶店Ｋにしなさいって、わたしはね、誰にもこのお店の名前も経営も取られたくないだけなんです。カフカ研究所だなんて絶対にダメだと思います。いや、ダメなんです。こまります」

# 筒井祥文川柳句集『座る祥文・立つ祥文』を読む

野口 裕

現在、とあるＳＮＳにて「気儘徒然句鑑賞」と題する短詩形定型詩の鑑賞文をおりに触れて書いている。

先日、川柳作家筒井祥文の遺句集「座る祥文・立つ祥文」を送られて以来、取り上げる作品がそこに集中するようになった。句集は、セレクション柳人「筒井祥文集」に収められた既発表句を前半の「座る祥文」とし、それ以降の未発表句を後半の「立つ祥文」としている。

セレクション柳人「筒井祥文集」が発刊された当時、なんとか彼の作品を論じようと、試みたことがあった。だが、できなかった。今回、遺句集の二三句を取り上げるつもりで、書き出したのだが、気がつくと通読するような勢いで、書き継いでいる。「座る祥文」を通り越して、現在「立つ祥文」の作品を眺める地点まで来ている。なんで、彼が生きている間にできなかったのかと自嘲してはいるが、やはりできなかっただろうなという気も一方ではする。

処女作「吉原御免状」が直木賞候補となった作家隆慶一郎は還暦を過ぎてから小説を書き始めた。その理由を「かつて師事した小林秀雄が存命の間は、とても怖くて小説は書けないと思っていた」と、ウィキペディアは記す。

筒井祥文と愚生は同い年であり、師弟関係はなく、怖いわけではない。だが、何を書いても親分肌の彼は笑い飛ばすだろう、その笑い顔を想像した途端、句と正面から向き合うのが難しくなった。この句はこう考えられるのではないか、そうそうでしょうワッハッハ。こうも言えるのではないか、そうでしょうなワッハッハ。そのうち、考えは堂々巡りを始める。本人が目にする前に愚生の脳内で文章は消滅した。

奇妙な弔い合戦ではあるが、かなり書き溜まったところで、一端まとめておくことにした。前半の「座る祥文」に関する鑑賞文、定型の前置きを二句目以降は省いて以下に記す。

★　★　★

**無い袖を入れた金庫がここにある**

筒井祥文川柳句集「座る祥文・立つ祥文」より。

一読、思いだした句が、

無い筈はないひきだしを持って来い（西田當百）

川柳では、句評の際に時事との絡みはよく話題にする。しかし、先行する句のことはあまり言わない。俳句とは対照的ではある。だが、先行句を念頭に置くことで、深く味わえる場合もあるはずだ。上述の句などはまさにそれにあたる。作者もそれを勘定に入れていると考えて良いだろう。

もっとも表面上は軽々と、そんな思惑は見せない。どちらかというと、中島らものキャッチコピーとされる、「家は焼けても金庫は残る」と似た空とぼけを彷彿とさせる。「無い袖」は慣用句ではあるが、どこか哲学的な想念へと誘うところがあり、そんな物を入れているとはついぞ見えない金庫がまた、厳めしさと裏腹のユーモアを漂わせる。

先行句を踏まえつつ新たな視点を打ち出しているところ、見事な句を書く男であったなあと、遺句集の前にしてため息をつく読者がここに居る。

**ボロボロになったものなら信じよう**

軽くジャブを放ったようなマニフェスト。軽いけれども揺らがない。ボロボロになるまであることが信頼につながる。信じてから起こす行動を、ちょっと見てみたい。

**月に手をゆらりと置けば母が来る**

彼には珍しい母物。思えば、家族については語らない人であった。であるから、生涯に母物一句賜の贄、というような駄句までつい出てしまう。

月は何の比喩であろうか。色々と想像出来るが、中七との絡みから家を離れての出来事と考えられ、ゆったりとした口調にはちょっとした達成感がほの見える。家を離れて、ようやく家と出会える不思議がそこにある。

**追伸のそれは見事なジャズである**

ジャズ、特にアドリブを意識しての句であろう。

追伸は何を書いても良い。本文と付かず離れずの関係を保ちつつ、その場で思いついたことを書いてゆく。うっかりすると、本文より長くなることも。それを含めての、受け取り側の感想となる。

しかし、こんな事を書かれると、これから追伸が書きにくい。

**水垢を水で洗えば佐渡おけさ**

「豆を煮るに豆殻を以てす」を思い出すような構図。もっとも、哀切きわまりない故事に比べると、日常生活の面倒な些末事は笑える。水垢に汚れた風呂桶を洗いながら、桶からの連想で佐渡おけさが頭の中で鳴りだした、というようなところではある。

佐渡おけさが出てくるあたりに祥文の素養がほの見え、煩さ方を多く従えながら一座を率いたかつての彼の貫禄が滲み出る。

**窓の位置定まり馬はまた歩く**

馬の位置ではなく、窓の位置が定まるのは馬が静かに佇んだせいだろう。たまたまその位置を見ることができた作者の奇跡。

しかし、それはほんの僅かの出来事である。馬はまた歩き始める。そのときに、作者はそれが僥倖であったことに気づく。おもむろに作者も日常生活の行動に戻るはずである。

**再会をしてもあなたはパーを出す**

あなたと書いてあるが、あなたから作者に向かって言われた言葉ではなかろうか。とぼけつつ、わざと負けてやる人柄と思われる。パーは握手の始まりでもある。





**会議室から音のない空を見る**

二句前に、

音の出るものを天神さんで買う

がある。両者を橋渡しして

つくづくを繋ぐ駱駝のゆくゆくや

を置く。無味乾燥たる現代生活の活写が行われていると見るべきだろう。

ここまで、句集には否定形表現が散見する。冒頭の

めっそうもございませんが咲いている

から、

ウミネコが群れる日付のない日記

スリッパはまだ快音を放たない

あなたが消える消しゴムを差し上げる

老人が違う光の中にいる

湯どうふのさっぱり君が解らない

有りもせぬ扉にノブを付けてきた

くしゃくしゃの縮図くしゃみが止まらない

ない・消える・違う等々、一端打ち出した情景を否定することで、読者の想像に登場する白けた景は、定家の「花も紅葉もなかりけり」以来の常套手段ではあるが、情緒を運ぶ機能とは別に存在し、現代という時代を象徴するものとして生きた表現となっている。

こうした否定形表現の多用が川柳の世界ではどれほどあったのかは知らない。しかし管見のおよぶ限りでは、あまり行われていないのではと思える。

祥文が、川柳の伝統を背負いながらも、現代の作家であった証しがこのようなところにも現れているのではないだろうか。

**歌舞伎座の裏でばらけてしまう午後**

歌舞伎鑑賞の後に、それじゃまたねと散会する歌舞伎愛好家の集まりと読める。ただそれでは、「ばらけてしまう」にある否定的なニュアンスは、歌舞伎鑑賞後の感傷か。と、一応書いてみたものの、京都人である筆者がなぜ歌舞伎座なのか、ばらけてしまう集団と筆者の位置関係はどうなるのか、等々、考えてしまうと隘路にはまりそうだ。うっすら、そこはかとない寂しさを感じる程度で留めておく。

**見返りの坂から月へ昇る墓**

昇るのは墓という奇想が句意なのだろうが、遺句集の中に置かれると昇るのは作者で、作者が己の墓を見下ろしているような読みの錯覚に陥る。だが、まあそれは置いておこう。

月は見上げるものだが、見返りを持ってくることで軽い違和感をかき立てつつ墓で締める。「月に」とやると解りやすくはなるが、「月へ」のダイナミクスは薄れる。

多くの昇天譚は人の昇天であるが、墓の昇天は珍しい。乗り遅れたか。

**背信のじとっと濡れた靴を履く**

背信と濡れた靴が心理的に近いので、句会に出句された句なら愚生の選には入れないだろう。

だがそれにしても、じめじめとした濡れた靴の心理的効果は侮りがたい。何に対する背信なのかは読者に預けられている。普通、多様な読みの成立する書き方は、怠惰な読者を通過させてしまうものだが、濡れた靴の体感がそれを防いで余りある。

一端、句の前で立ち止まれば、読者は蟻地獄にはまった虫けらのように、人生の様々の場面で引き起こした背信の記憶をたどることになる。悪夢の一句。

**自転車で来たので自転車で帰る**

当たり前すぎる句ではある。この手の手法で有名なのは、

次々に走り過ぎ行く自動車の運転する人みな前を向く（奥村晃作）

であろうか。当たり前の景が、いとも奇妙に不可思議な景と見えてくれば、作者のねらいは成功する。では上掲句の場合は？

成否を論じる前に、読む側の一工夫で必ず奇妙に見えてくる方法を述べておきたい。読み手側がこれと狙いを付けた言葉に括弧を付けると、結構な確率で景の玄妙さが浮かび上がってくるのだ。奥村晃作の歌の場合、

次々に走り過ぎ行く自動車の運転する人みな「前」を向く

とやると、その奇妙さが浮かび上がる。

上掲句の場合、

自転車で来たので「自転車」で帰る

とすれば、来た時の自転車と帰る時の自転車の差が解ってくる。来る時には、自動車、バイク、徒歩など様々な手段があり得た。しかし、帰る時の手段は限られる。帰り道のわびしさが染みるような気配が漂う。旅の達人だった内田百閒が、行きの列車は一等車を奢り、帰りの列車は二等車でそそくさと帰るべしと説いたのと軌を一にする。

しかし、頑固な人はやはり当たり前すぎると難じるだろう。それはそれでかまわない。まさに人それぞれであり、作者のもうひとつの狙いでもあっただろう。

**カッポレをちょいと地雷をよけながら**

カッポレがなぜ片仮名なのか？ 漢字で書くと、活惚れになるそうだ。多分、意識的か無意識かは解らないが、平仮名や漢字で書いた時に生じる情緒を排除するために片仮名が選ばれたのだろう。キートンの「セブン・チャンス」で、転がり落ちる岩を巧みに避けながら坂を上るシーンが思い出される。

**短歌的呪文で滝を歩かせる**

かつて短歌は奴隷の韻律と呼ばれ、その情緒を「短歌的叙情」として非難された。ということを知った上での「短歌的呪文」ではないかと思う。そうした議論を伴う用語を、素知らぬ顔でスライドさせる。

多分、本人に聞くと、そんなん知らんでと煙に巻かれるはずだ。彼は滝を歩くのに呪文など必要としない。

**鳥の声　水は力を抜いている**

一句後にも水の句がある。

祭から引く水　旅の口笛に

さてどちらを選べば良いかと迷うところではあるが、情緒に凭れ加減の祭の句を避けて、鳥の声を選んだ。とは言うものの、この鳥の声が水が力を抜くためにどのように作用しているかは見極めがたい。

間抜けなカラスの声やのんびりしたトンビの声に応じて水面もだらけているのか、ヒヨドリやモズの鋭い声にもかかわらずにノンビリした水面なのか。あるいは、かまびすしい雀の群れなす声をいなすかのように静まりかえった水面なのか。はたしてどれなのか。おそらく、どれでもありどれでもないのが句の解なのだろう。一字空けが深淵のようだ。

**ご公儀へ一万匹の鱈連れて**

ご公儀と言うような言葉がすんなり出てくるところが、京都生まれである祥文の出自を表している。さらに一万の鱈を連れて行くところ、ある種のプロテストを連想させ、大学紛争の推移を高校生として見ていた、彼の年代を彷彿とさせるのは、同年齢の愚生の思い過ごしか。

大学の街でもある京都のあちこちの状況を仲間と話し込んだあと、家に帰ってみると、古ぼけたテレビで水戸黄門の再放送をやっている。というような想像をしてみる。若き日の祥文氏は、いかなる面持ちであっただろうか。

**四時頃のうどんののらりくらりかな**（筒井祥文）

この句は、どうしても落語「時うどん」を思い出す。下げの前で、どじな主人公が一文浮かそうと、うどん屋のあるじに時刻を聞く。その答えが

「四つ」。それを踏まえているのだろう。

落語では郭の冷やかし後の行動なので、「四つ」は夜の話と考えられるが、句中の四時は昼食にも夕食にもあやふやな時刻である。中途半端に食べ、残って若干ふやけた麺をどうするか。残すか食べきるか決めかねて、どちらでも良いような気もして。まさにのらりくらり。

二ページ先には、

浅草の午後四時半へ振る一味

も。発想の根は同じ所にある。

**人魂が今銀行へ入ったが**

人はそれぞれ魂を持っているはずなので、銀行に入る人を人魂と呼んでもおかしくない。

にもかかわらず、白昼にふわりと浮かぶ火の玉をどうしても脳裏に浮かべるだろう。嫌々その連想はおかしいと、読者は火の玉を人間に置き換えて読むかも知れない。

だが、その人間は、人魂と書いてある効果からか、魂の抜けた幽鬼の様な人が銀行に入るところを想像してしまう。魂と書いてあって、魂のない人を想像するのは誠に奇妙だが、どうしてもそうなってしまう。

銀行に入った人魂はどうなるか。おそらく、銀行員からけんもほろろに取り扱われるだろう。

さて、拙鑑賞では銀行「に」入ると再三書いたが、句は銀行「へ」入ると書いてある。祥文句の特徴として、「に」と書いても意味が通じるところを「へ」を使用する場合が多々ある。

弁当を砂漠へ取りに行ったまま

純愛の栞をどこへ挟んだか

白昼へ帰っていった解体屋

ご公儀へ一万匹の鱈連れて

浅草の午後四時半へ振る一味

「に」を「へ」に置き換えても意味の通じる句も多数あるので、意識的にか無意識なのかは判断しにくいが、句の軽快さを印象づけたい志向が元々あるので、「へ」を選ぶ場合がよく出てくるのだろう。同じ五七五作家ではありながら、いわゆる俳人の場合、「へ」の使用を忌避する傾向があることと比べ対照的ではある。

この項、もう少し吟味の必要な事柄ではあるが、とりあえず書き留めておく。

**どうしても椅子が足りないのだ諸君**

少し前に話題になった、

ヒヤシンスしあわせがどうしても要る（福田若之）

とは、同じ「どうしても」でもえらく違うなというのが一読しての印象。短詩形には珍しい演説調であるのも目を引く。どんな句を書いても、祥文句は常に他者の目を意識しての句である。加えての演説調であるから、読者の方も多数の中の一人ということを意識せざるを得ない。

そこで、「椅子が足りない」と宣言される。椅子取りゲームの軽やかさを秘めつつも事態は深刻であるが、他者に向かっての宣言は話者にはどう跳ね返ってくるのか？どうも、話者には椅子が確保されている気配がある。椅子が足りないと言いつつ、己の椅子は保証されている矛盾。空疎に響く演説調が抜群の効果を発揮している。



# 女のみち〜進路篇　⑥

モス堀渕敬子

私は今63歳、3月末で64歳になろうとしていますが、女に生まれて損した、男に生まれればよかったと何度か思いました。

今もまだそうですが、日本では男はこうあるべき、女はこうあるべきという考えが色濃くあります。

私が関西学院大学に行きたいというと、両親、特に母が大反対しました。女は四年生の大学に行く必要はないというのです。女が高学歴だと、結婚相手が嫌がるというのです。当時私はまだ17歳。もちろん結婚相手のケの字も見当たりません。

短期大学ならいいというのです。でも、中学の英語教師になりたいと思っていたし、関西学院大学の馬術部にも憧れてました。

経済的に無理だと言われたら諦めていたかもしれませんが、そうした環境ではなかったので納得できませんでした。

高校3年生の11月になった時も、泣きながら母に訴えていたのを今でも覚えています。

母は、島根県のあえていうならド田舎出身です。看護師と助産師の資格を持っていて大阪市立病院でバリバリ働き、かなりの給料をもらっていたようです。

でも、母の考え方には男尊女卑が残っていましたし、1970年代当時はまだ、女は四年生の大学に行く必要はないという風潮があったんですね。

結局、関学の文学部一つだけ受けました。でも、やはり勉強不足で不合格となり、浪人決定です。女子大の二次募集を勧められましたが、断りました。

予備校へ行く学費もだしてもらったので文句を言うべきではないでしょうが、私がかなり抵抗した結果両親があきらめたと思っています。

1年後、無事第一志望の関学文学部に合格し進学しました。

合格したあと、母は知人への電話で〝敬子は関学受かったんですよ〟と自慢気に言ってました……

## ◆東方三博士　詠

岩脇リーベル豊美

一神教の聖人ごっこと霊視と星
狂気の無為世界に游ぶ地震雲
娑婆世界に母系の巣編む信天翁
言いなりの流星群墜ち穴開ける
命乞い縦書き手紙に神経伝達物質
宙吊りの履歴片づけ児の産まる
離脱しこころ進化論否定の理由
燃える森の秘密の扉半開き
啓示構造的にあり得ぬ自画像
師走の蚊肥らせる私の血



## ◆益田っこ通信

元（はじめ）正章

### ▼36号／「名残りの世」　〈2020.01〉

タイトルを石牟礼道子著の標題『名残りの世』から拝借しました。

「一人の人間のいちばん内側にあっておのおのを苦しめている煩悩」といえば、普通「妄念・欲望」と否定的に捕らわれがちですが、天草地方では、当然あるものとして把握され、「煩悩が深い」とは「情愛、心が深い」とのこと。「充分自分の思いを周りの人たちと交わし合って死ぬのを往生という」。「普通の日常でも人間いかなる関係であれ、他者と心溶けあう瞬間を待ち続けて生きている」。

益田での3年弱の生活にあって心したことは、生身の人間の顔が、まならに浮かんでくるような関係を持つことでした。言うまでもなく、どこであろうと「人間生きるということは大へんなこと」であって、「あたりまえに生きるとはどういうことか」を、何度となく反復しては、学んでいます。この地には、いまも「結い」の気持ちが残っていて、それだけに皆と心を通い合わせて生きてゆくことで、「益田教」なる土着キリスト教を産み出すことができればと願うばかりです。

「宗教というものは、終には教理化することのできない玄義というものを、その奥に包んでいるのではないでしょうか」。「玄義とはそのような衆生という存在だと私は思います」。「拝むことしかしらぬ衆生というものこそ、じつはこの世界のいちばん奥をなす存在なのだ」と石牟礼が語るとき、わたしもまた煩悩深く、情愛でつながっていこうと思っています。新しき年も、「淡いえにし」を風の声に託して、みなみなさまに「益田っこ」を送り続けていきます。

帰一在天

〈編集部註／この「益田っこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです〉

# ◆れいせい

大橋愛由等

川風が過去のペエジをゆっくり燃やしていたら

〈〈のっぺりな海は今日も失語のままのようだから〉去年から今年にかけてなんとか生きてきた尻尾（テエル）が南西に向かってだけ感応しているさまが痛々しく思い始めた冬のその一日は重くたちこめる雲が「ぼくは誰だかあててごらん」と誰彼となく語りかけているようでいていていやそれは私とあなたにだけつぶやいているのだろうと錯覚しようかと迷っているうちにカフェ・コン・レチェは冷めていく。〈潮風手帖という日記帳に翠インクで書き込む傍から記憶は解体していくのか〉出航間際まで連絡船に残された黒い四角は海底から聴こえてくる声の群れをつなぎ合わせようと画帳を拡げたのはいいもののそれは多くの沈船が書き込まれている海図なのであってそのつなぎ合わせの書き込みを拒んでしまうので仕方なく沖合いの群魚たちに話しかけたところ「ヒポクラテスが間違えた綴りがそのまま海面に広がっていくのを見たことがあるでしょう」と答えたので連絡船から降りてチュロスが食べたくなったのである。〈岬に立って懐古するのは三つの詩片が風に溶けるまで待ってと云われてから〉もうここにはAもSもKもいないのだと分かっていても赤土を何度も掘り返してみたり樹皮を何枚もめくって残滓が語りかけてこないかあるいは失踪した司祭がわたしとあなたのために柑橘類を祭壇に置いていっていないかを確かめようとするのだが海から海へ吹き抜ける風がわたしの周囲のすべての実相を発声器にかえて通り過ぎていくそのありように立っていること生きていることのアポリアを受認しようとするその姿を樹齢三百三十年の木陰に隠れている新月に嗤われている事態にそろそろ気づく真似をしてみようか。



# ◆ごめん

月村　香

ごめん、だからごめん、baignore（浴槽）に似たdivan（ソファー）のところからごめん、ニーチェのようにごめん、スタンダールのように、ごめん湯船が冷えてしまうまで自分を見失っていてごめん、着替えが見つからずまた君を待たせてしまってごめん、さっきから声が震えるんだ、それだけだとしても、ごめん頭に浮かんだことばが変な絵のようにさえ映らないんだね、ごめん口にするとあぶくなってしまってごめん、馬鹿の総代でごめん、だから本当は愛してないなかったと君に言わせてごめん、すべてはひとときのことだからもう構わなくていいんだ、ごめん、もともとぼくは恋愛には疎いみたいだそれさえも気づかなかったし毎日月の形を見にバルコンに出る小男なんだ、ごめん、きのうそばにいた君が風呂から出るといない不在とはアプサンスと言うねそれは知っていたそういうことばには詳しいんだそういうことばに好かれるんだことばが寄ってきて君と生活していた気配を感じていることが当たり前だったけどぼくは未だプレザンスなのに君は急にことばの意味すら忘れてしまって、と男が雛菊のように泣き出す「男が泣く」なんてバナルな表現バナルすぎてまたバとバばっかり重なり合ってそれでも平気で泣くのね男は肩から尻まで届く寝巻をブツブツ言いながら取り出すと一瞬反撃に出るかのごとく女に言う「君の髪は体と同じ匂いがする」「そうしているのだからそうだわ」その時女の本性は無機質だったからたぶん無機質の香りがしただけだ遠くに見える本日の日課表に書いてある①朝はバナナを食べる⓪フランス語の小説を読む②君とぼくがどこかを歩いている③きっとどこかでお互いがお互いを馬鹿にする以上暮しってそんなものたわ女は平気なんだが男はこだわる一体風呂の中で何を考えているのか、どちらが精神であり肉体であるか不明下ににおいてその女Aはその男Bは髪を乾かす女のドライヤーの音で女の耳は遮音された、聞いておくれ、ごめんごめん、鳥を放してしまったよ、そう君は悪くない、ごめん、女は聞こえない

註：baignoire（仏）ベニョワール
divan（仏）ディバン

## ◆真珠採り

にしもとめぐみ

天から舞い降りる柔らかい
羽毛の1000のbaiser※
通り抜けて行くのは
ゼフィールだろうか

吐息に包まれた
果てしない時
眠りは夢の中で
蚕の糸を編み出し続ける

暗闇が無窮へとつながる
それは誰であったのか
そして存在したのかも
もう　わからない

その　ひとときは
美しい『おとぎ話』に変わる
ここへお座り　愛しい人
永遠についての話をしよう

※注　baiser(仏語)
エロティックなニュアンスを含むキスのこと

## ◆かなへび※

にしもとめぐみ

丸い瞳
しなやかな体
草むらにひそんで
じっとしている

ある時は
陽あたりのいい石の上で
ある時は
すばやく物陰に

こどもの頃
夢中で捕まえた
　ゆびさきで　そっとお腹をさすってやる
　目を細めて気持ちよさそう

少女の時間
野原や木々　風の中
小さな生き物と一緒に過ごした
聖夜は流れて　星は何億光年も

※注／ニホンカナヘビの語源については詳細不明であるが可愛いらしい蛇の意で「愛蛇(かなへび)と呼んだという説がある」

## ◆宴こぼし

中嶋康雄

宴こぼしの生業は
よだればかり
白く固まり腐っているし
よせてはかえす真っ赤な波間に
ただふるえながら
裸ん坊で立ち尽くす
どこも見てない
おへそが臭い
宴こぼしの多言語が
ごまかしだらけを助長する
寝ぼけ眼がほげほげと
茶色いご飯も食べている
すえた臭いが鼻をつく
散り急ぐ櫟の葉っぱどもと
穴ぼこだらけのまま
黒まだら
縁側で芋焼酎を飲んでいる
散り散りに

暴れている昼下がり
軒下の茸の背丈が
宴こぼしの背丈に追いつく
夜の間だけ楽しい
世間は夜だけあればいい
宴こぼしの痩せた腕
青黒い血管に蹴躓くお願い事は
死んだあとのことばかり
宴こぼしが欠伸をすると
なんだか悪いものが行ったり来たり
埃の綿が舞う隅っこで
とろとろと怠けているから
また怒られている
なにも変わるはずもない
狭い道の両端は
雑草ばかりが笑っているし
宴こぼしの出番も
もうなくなっている
ここら辺りで
こけている
膝小僧の痣と
かさぶた

## ◆遺失物

高谷和幸

列車に残されたあなたの遺失物は羽毛ぐらいの重さで、重さをとどめようとしたその時からそれは弾丸のように宙に放たれたのです。「わすれられない」重さは極小のものでしょうが、「わすれられた」重さはそれに反して、所謂単位を超えた存在として「わすれられない」ものを打ち振わせていくのでしょう。あなたが腰の一部を回転して椅子から立ち上がった時にも、連結部の機械的なきしみみたいに、身体のどこかに残存していたのをあなたは知っていたかもしれないのです。羽毛の一枚の重量がたてる音。そのように身体から離れた重さを今の季節は聞き漏らしません。あなたの信じた父が「思い起こせ」と云い、二つの対立する世界がどこから来たのか、それはどこに向かおうとしているのかを説いて、それは思いの同じ物が日の当たるところと影になったところの、寒空に細い弧をひいて残ってあるものだから、まずは手のひらの重さを信じなさいと、雨に打たれながら父が語っていたのでした。一枚の羽毛が落ちる前に。



## ◆ベランダ

田村周平

ベランダから公園が見える
小さな緑に囲まれて
忘れられたような遊具が不釣りあいだ
ぽつんぽつんと低いビルのあいだに
家々の屋根がつらなる
少しむこうには河があって
その先に海もあるのに
水と大地をわけるところに
土も草もないので
ここには潮の香りも届かない
近くに中庭のある家が見えて
柿の木のまわりに
わづかなやぶもある
鳥が実をついばみ　蝶も飛んでいる
鳥も人も虫も
こんなところでくらしているのだ

赤穂市加里屋一七九七
ぼくの出生届にある所番地
そこに建物はない
シバトクは金物屋で
二階に間借りしていた両親の
長男として生まれた
どこにでも住めたのに
今も近くに住んでいるが
風景は変わってしまった

風景にとって六十年は
人の人生にくらべると
わずかな時間だろう
後期高齢者といわれて
ぼくも特有の三大疾患を持っている
つまり
アルコール依存症　ニコチン依存症　こいわずらい
けれどこの三つは
認知症予防にいいんだって

（この作品は2019.12.02「カフェ・エクリ」合評会で発表されたものを本誌に転載しています）

# ◆再会

高木敏克

目覚めると見覚えのある駅である。私は慌てて飛び降りた。駅は裸の鉄骨で構築されなければならない。壁があると視界がさえぎられて駅の構造がわからなくなるからだ。壁がなければ誰も駅で迷うことはない。それなのに乗客は壁が好きなのだ。つまり、少しは迷いたいのだ。生きることは迷うことだから、壁がないと狂いそうになるらしい。壁は部屋を作り待合室にはその日に停車する列車名と行き先の駅名の札が掛かっている。駅の札の中には紙の札もまざっているが、黄色くなってキノコの匂いのするものもあった。札の駅はどれも地方駅といえる小さな駅ばかりであるが、大きく交叉する乗り変え駅の十字架で結ばれている。僕が目覚めたのはその乗り換え駅である。立体的に組み上げられた構造の見晴らしのよい吹き抜けのプラットホームは乗客の足をひきとめない。今はもういない駅長は壁を無くすことを心がけ、全ての平面を透明に変えようとした。もちろんプラットホームまでガラスでできている。

それでも私がいつも迷うのは、北にのびてきた南北線が東西線に交わり、国境線で時間も交わるこの駅だ。乗り換え駅には名前が無い。その代わり踏切がある。踏切の両側には改札があり、駅員が数人立っていて、色々と乗客に指示を出しているが、まるでどうしても聞き取れないミサである。はたして何語なのかも言ってくれない。ただただおおぜいの人々が重なって器用におたがいの間をすり抜けながら暗闇に消えてゆく。あるいは、この名前のない駅の形を決めるのはこの人たちで駅長なんていないのではないか。

真っ黒に錆びた列車が鉄骨の駅に入ってくる。私はその列車に乗り変えなければならない。

実に列車の記憶というものは追体験によってよみがえる。新しい朝が昨日の朝を思い出すのか、あるいは昨日の朝が新しい朝に出会うのか乗り換え駅には名前も時計もない。

今さっき、この目覚めの朝に自分の記憶にはないはずの記憶が現れた。そのことに気づくのは深く眠りすぎたからだ。家で眠るより列車の眠りの方がこんなに深いから行ったこともない樺太の朝に目覚めたのだ。どう考えてもこれは祖父の記憶に違いない。記憶は遺伝するとしか思えない。祖父の遺伝子構造が記憶を再生する構造を含んだに違いない。記憶は何度も何ども夢の中で研ぎすまされて現実以上に鮮明になってゆく。このことを忘れさせたのは仕事ばかりしていて眠りが浅すぎたためだ。

北に向かっていた列車の横の道路はとても広かったので横断するのにも時間がかかったのに乗り換えた列車は針葉樹に挟まれたまま製紙工場に着いた。黒い列車は工場に石炭を送りつけた帰りに大きなロール状の紙の束を積まなければならない。私が降りなければならないのは製紙工場を一つ乗り越した駅で、そこで線路は終わっている。工場労働者のための駅でもあり黒い列車が眠る車庫もある駅だ。そこはのんびりとして石炭が鉄板を引っ掻く音も太巻のパルプが貨車を叩きつける音もない。時々ヤギの声がして駅員もいない。壁のない駅構内に藤色の裾の広いワンピースで君が現れたのは迷いの全くない再会であった。早く語りあいたかったが君はいつまでも笑ったままだ。

「全然変わってないね、僕は白髪も増えたけど」

「あなたのことは写真で見ていたからすぐに分かったけど、ここには写真機なんてないし、よく分かったわね」

「他に誰もいない。君と僕しかいないよ」

微笑んでいた君は口を押さえてさらに大きく笑った。



# ◆庭にも海岸にも音が沈む

大西隆志

苔をたもつものは
小さな掌に仕事が
落葉と芽吹き籠へ
首に巻くのは木綿
亡き人の記憶の種
蒔くことの意味を
誰かが問うてもね
静かに時間は流れ
自転車の旅の人は
ことばを楓の一枝
刺すように投げる

川を下りながらも
息の使い方に注意
庭から河口へ走る
下るのは重労働の
川船を操る漕ぎ手
下りは楽なんだが
上りは両岸から縄
手繰り寄せ引張る
えいやえいやと声
情景を背に生きる
喜び哀しさの輪唱

急に海が走りだす
遠浅の地には古層
生活が匿されたか
うちうみへの帰還
砂浜に転がるのは
流れ着いた彼岸の
蒸気機関車の形態
海からやって来た
傷ついた人形の腕
夕陽射すテラスに
風景の解体音響く

# ◆WORK2020 DMajor

大西隆志

ことばがほどける
なげだされたことばが
流れに櫂をいれ
すり抜ける航跡を残して
指し示す世界の片隅に
ぽつねんとして
真実をてらしている

## ◆夕方に出かけるから

木澤 豊

わたしは　机の引き出しを　ぱちっと閉めた

ビルの向こうに汽船が近づき
汽笛が鳴っているのに　だれも気づかない
どこにいても　碇を下ろすおとばかりきこえる
わたしに書誌はなく　書いたという残響が　かすかに
わたしに　とどく
耳を澄ますからか

で　老ねこは睡っているので
行ってくるぞと声をかけ　家を出た
このままかえらないこともあるだろう
階段を降りる足音が　まだ　聞こえる

並木通りで　青く光る時計を見た
帰るとか帰らないとかじゃなく　時計はなつかしい

地下道の奥の保育所
天井を列車が走る音がする
子どもたちは　みな　両手を挙げる

ホテルの玄関へ渡る溝の
鉄板の下に　灯がともった
テーブルを囲んで　笑っている家族がいる

わたしが　がらんとしたホールに入ると
大きな木のテーブルに　いくつか
傷がついていた

船が窓から入ってきて　椅子がカタッと鳴って
ガラス越しの夕日があかい

もう一つの階段を降りる
あれは　たしかに　わたしの　足音だ

野菜とベーコンとインスタントラーメンで
最後の夕食だ



## ◆とぼとぼ

黒田ナオ

とぼとぼと歩いていたら
後ろから
とぼとぼがついてきた

とぼとぼとぼとぼ
とぼ

もしもし、あなたは
と声をかけたら

とぼとぼに
捕まえ
られたわたしは

いつも暗い場所にいる

廊下の蛍光灯が
ついたり、消えたり
消えたり、ついたり

とぼとぼも　わたしを抱いたまま
ついたり、消えたり
消えたり、ついたり

ふ、あ、ん、な、き、も、ち
ふ、あ、ん、な、わ、た、し

天井から
真っ逆さまにぶら下がる

空中ブランコみたいに
ぶらーんぶらーんと
ゆれている

ぶらーんぶらーん

とぼとぼとぼ

# 神戸詞（うた）あしび

## 138-2020.01.26 大橋愛由等

### 旅のトラブルはつきもの
### 奄美紀行は今年も続く

奄美の冬は今年も神戸からの年に一回訪れるマレビトを優しくかつ試練ぶくみで迎えてくれた。

阪神・淡路大震災の翌年から毎年一月に4日間ほど奄美群島を旅することを続けている。今回で25回目となる。

どのように神戸から出発して奄美群島を巡ったかをその交通手段を紹介することにしよう。そのことによって奄美に向かうチャンネルがかつてに比べて多様になっていることがわかるのである。

1月20日（月）神戸空港から鹿児島空港を経由して沖永良部島へ。本当は去年のように那覇空港経由にしたかったのだが、那覇から沖永良部島に着く便が遅かったために断念（島に少しでも永く滞在したかったので）。鹿児島空港でのトランジットの時間は長いものの、地元の県域紙（南日本新聞）を読んだり、持参した資料を読み込んだりするので、時間はすぐ経ってしまう。

翌21日（火）は船で徳之島へ向かった。やはり船の旅はいい。しかし旅はトラブルがつきものである。今回は携帯電話（iPhone）の紛失であった。それも二回。最初は船内でなくしてしまい、大騒ぎしてなんとか発見できた。亀徳港で停泊時間が長かったのが幸いした。二度目の紛失は、徳之島で宴をしていた居酒屋で忘れていたようだ。店の人が警察に届けていたので、連絡を取り合った結果、徳之島署とやりとりして返却されることになった。近年トラブルが起るのはこの島が多い。去年も飛行機の突然の故障で飛ばなくなり、航路に変えてなんとか次の島に向かうことができた。島のヲナリ神に嫌われているのだろうか。

22日（水）は空路で徳之島から奄美大島へ。ここでも判断を迫られる事態に。奄美市名瀬の中心部に向かうリムジンバスに乗るためには一時間以上待たなくてはいけない。仕方ない。大変な出費だけど、タクシーに乗ることにした。限られた島での滞在時間である。時間を金で買うことした。車中、タクシーの運転手に語りかけた。奄美市笠利町笠利に住んでいる人であると言うので、私の小学校の同級生の父親は笠利集落出身であることを思い出し、その同級生の姓名を語って知っているかと聞く。知っているという。そこからいくつかの会話が生まれる。カトリックの信者が多いことで有名なこの笠利集落。いまでも約3割のひとが信者なのだという。奄美（シマ）はこうしてどこかでなにかとつながっていくものである。

そして最終日（23日〈木〉）は奄美大島空港から関西空港へLCC（ピーチ航空）を使って帰神した。去年は同じLCCでもバニラ航空という名称だった。バニラがピーチに吸収合併されることになり、去年の5月から12月までの間、関空から奄美大島までの便が一時的になくなってしまった。LCCの就航によって東京・関西からそれまでほとんど見かけることのなかった一般観光客が一気に増えることになり、奄美空港の設備も拡充されたりして、その変化が手にとるように実感するのだった。ただ、このLCCというのは飛行機の発着時間があいまいで遅延などは常態化しているが現実である。ちょうど到着時間が混み合う時間であったこともあり関空上空で30分以上旋回しながら着陸を待たされてしまった。

かつてなら何日もかけて旅をしていた奄美紀行だが、今は短時間のうちに島々をめぐることができる。そして島々にはわたしの多くの友人・知人が群居しているのだ。

冬はスポーツ合宿が多い。徳之島浅間の旧陸軍滑走路

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.149
神戸

2020年01月26日　通巻149号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)